



黒トリュフ人工生育順調

世界三大珍味の一つとして知られる「黒トリュフ」の人工的な生育に昨年10月、国内で初めて成功した県森林研究所と国立研究開発法人「森林研究・整備機構」森林総合研究所（茨城県つくば市）が、昨年から6倍となる12個の発生に成功した。栽培化に向けて、より短期間で安定的した栽培方法の確立を目指す。

(華原士文)

①人工的な生育に成功した黒トリュフ。直径3cm弱で重さは6.7gほど
②黒トリュフについて解説する水谷主任専門研究員=いずれも岐阜県内の試験地で



黒トリュフは現在、国内で流通する全てを、一部の食用品種の栽培方法が確立されている欧州や中国などからの輸入に頼る。両研究所は国内に自生する品種「アジアクロセイヨウシヨウウロ」に着目し、2016年に人工的な生育に着手。昨年10月に2個の発生に成功した。今年10、11月には、昨年と同じ岐阜県内の試験地で黒トリュフが12個発生。もともとの菌と遺伝情報が同じであることから、菌が定

昨年2個→今年12個 発生6倍に

県森林研究所など 植栽に使用のコナラ成長要因か

着し、土中で安定的に増殖していると考えられるという。シイタケなど一般的なキノコの腐朽菌と違い、トリュフやマツタケなど菌根菌は樹木と共に育つ種類。森林総合研究所の山中高史東北支所長（59）は昨年よりも多く発生した理由について「植栽に使ったコナラが昨年よりも成長したことが要因では」と推測。生育については「樹木のコントロールもしなければいけない。他の菌との競合もある」と難しさを語った。

両研究所は、土壤の水素イオン指数（pH）や植栽時期の違いに加え、落ち葉の量や光の加減、湿度など生育に適した要因を調査していく。

県森林研究所の水谷和人主任専門研究員（63）は「植えてから発生まで7年半かかりました。今回的方法を他の場所でやって同じ結果が出るのか再現性を検証し、短時間の発生条件を調べるなど、栽培化にはまだまだくつもステップがある」と話した。

岐阜県森林研究所ホームページ掲載期限:令和8年1月27日

この記事は中日新聞社の許可を得て使用しています。